

投資のデジャヴュー既視感 前にも見た市場の展開？

Research Insights

- 感情に動かされると、運用計画は崩れる
- 最も優れた投資の考え方は、いつの時代にも通用するもの
- 最良の投資手法は、分散投資と長期計画を堅持すること

当資料のお取り扱いにおけるご注意

当資料は、アライアンス・バーンスタイン・エル・ビーが作成した資料に基づき、アライアンス・バーンスタイン株式会社が編集・作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。当資料は信用できると判断される情報をもとに作成しておりますが、その正確性、適時性を保証するものではありません。当資料に掲載されている予測、見通し、見解のいずれも実現される保証はありません。当資料の記載内容、データ、図表等は作成時のものであり、今後予告なしに変更される場合があります。当資料で使用している指数等に係る著作権等の知的財産権、その他一切の権利は、当該指数の開発元または公表元に帰属します。

アライアンス・バーンスタイン¹ のご紹介

資産運用を専門にする世界有数の資産運用会社です。

1971年に米国ニューヨークで設立、グローバルに機関投資家や富裕層、個人投資家の皆様に、国や地域のニーズに即した広範囲な投資運用サービスを提供しています。上場²している運用会社で最大級の約31兆円³の資産を運用しています。提供する運用商品はグロース株式、バリュー株式、ブレンド戦略、債券、オルタナティブ運用等多岐に亘ります。

アライアンス・バーンスタインの日本拠点はアライアンス・バーンスタイン株式会社で、1986年⁴に日本で投資顧問業務を、1996年には投資信託委託業務をスタートし、現在では3兆9,320億円⁵の資産を運用しています。

アライアンス・バーンスタインのゴールは「世界で最も信頼される運用会社」を目指すこと。そのゴールを達成すべく企業使命として次の3つを掲げています。

- 常にお客様の利益を第一に
- リサーチ能力を活用し、世界のどの運用機関よりも多くの知識を備える
- お客様が資産運用において成功を収め、心の安らぎを得ていただくために知識を活用し、かつ共有する

投資の普遍的原則

- 常に勝ち続ける（負け続ける）投資はない
- 良いポートフォリオはバランスが取れている：ある投資が値上がりする一方、ある投資は値下がりする
- ポートフォリオの一部に過度に注目してはならない—全体像を見る
- 長期的なポートフォリオを構築し、当初の目標から乖離していないか定期的な見直しを行う

1 アライアンス・バーンスタインには、アライアンス・バーンスタイン・エル・ピーとその傘下の関連会社を含みます。

2 アライアンス・バーンスタイン・ホールディング・エル・ピーのリミテッド・パートナーシップ持分がニューヨーク証券取引所に上場しています。

3 2011年9月30日現在。米ドル建資産額は約4,020億米ドル。円換算金額の為替換算レートは1米ドル=77.08円(2011年9月30日のWMロイター)を用いております。

4 アライアンス・キャピタル・マネジメント・ジャパン・インク(現アライアンス・バーンスタイン株式会社)の東京支店が投資顧問会社として日本において業務を開始した年月日です。

5 2011年6月30日現在のアライアンス・バーンスタインが日本の顧客から受託した受託資産を時価ベースで評価した資産額です。

優れた投資の考え方というものは、常に目新しい必要があるのでしょうか？

本当に優れた投資の考え方というものは、一度は耳にしたことがあるような考え方であるはずで、つまり、いつの時代にも通用する「知恵」に基づいており、だからこそ絶えることなく語り継がれているものであるからです。そして今も昔も同じように通用するのです。

いつの時代にも通用する「知恵」…

寓話にも、いつの時代にも通用する「知恵」が隠されていて、そういった教訓は投資にも当てはまります。例えば、骨をくわえた犬が橋を渡る話を思い出して下さい。犬はふと川面を見下ろし、そこに映っている自分の姿を目にして「その犬」がくわえている骨も欲しくなり、吠えかかろうと口を開けてしまい、くわえていた骨を川に落とす、というあの話です。

投資家も、ついこの犬のように考えてしまいがちです。高いパフォーマンスを誘うような投資対象や、逆に市場の混乱時には避難場所として安全な投資先が非常に魅力的に見えてしまうのです。相場が極端な値動きを示している時には尚更です。

昔の寓話から物事の真理が読み取れるように、過去の市場からも学べることがあります。短期の市場予測はできないかもしれませんが、市場というものは長

期で見れば上昇しており、時には下落局面があっても、最終的には回復しています。

…より良い運用成果が得られる

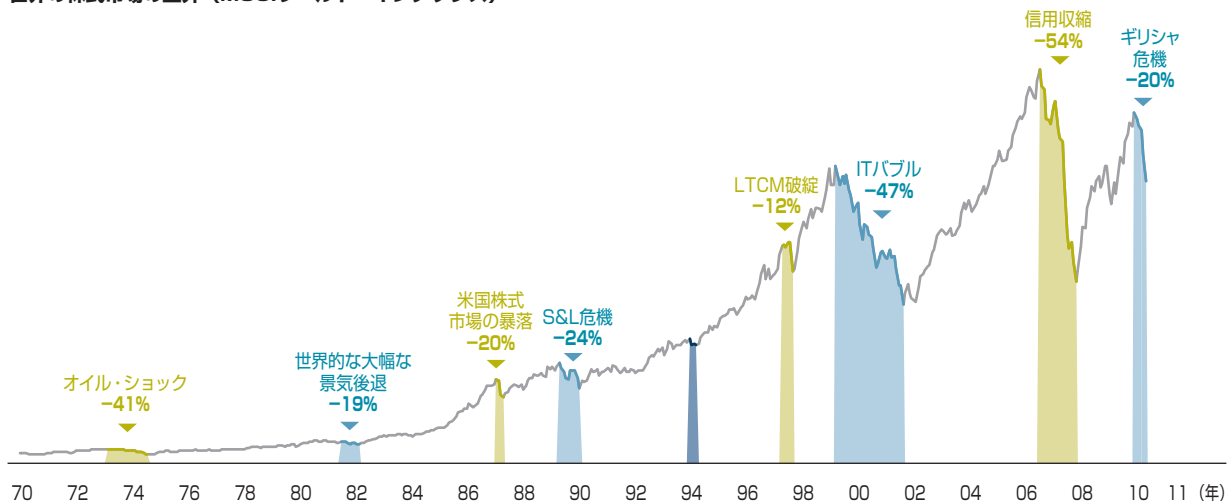
過去から、学びとれることは沢山あります。

市場の動きを予測できると錯覚してしまうのは人の常です。そう思いたいのはやまやまですが、後悔するような判断、ひいては思わぬ運用結果を招く事態にもなりかねません。

ファイナンシャル・アドバイザーの力を得て、長期的な資産の成長を目標に計画を策定し、被りうる損失を抑制しつつ、市場環境が良い時にも悪い時にも、予め決めた計画を継続することこそがより良い策なのです。

市場とは：短期的には急落場面があっても、長期的には上昇

世界の株式市場の上昇（MSCIワールド・インデックス）



過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。

投資家はインデックスに直接投資することはできません。

世界の株式市場はMSCIワールド・インデックス（1969年12月31日を100とし、2011年9月30日までのデータを指数化）を使用しています。

出所：ブルームバーグ、MSCI、アライアンス・バーンスタイン

タイミングに賭ける

値下がりしている銘柄を売り、値上がりしている銘柄を買うという戦法は一見良いように思えますが、売買のタイミングが余程的確でない限り、資産形成の努力が水の泡になりかねません。

市場での思い出はいつも良いとは限らない

人は昔を懐かしむものですが、1970年代に株式投資をしていた人にとっては、思い出は楽しく懐かしいことばかりではないでしょう。

1973年初頭から1974年終盤まで、世界の株式市場は、ほぼ2年間に亘り下落するという苦境に直面しました。この期間、世界の株式市場のパフォーマンスを示すMSCIワールド・インデックスは、実に40%も下落したのです。

続く市場下落の中で「もう売るしかない」と感じた投資家の気持ちはよく分かります。しかし、もし1974年に売却していたならばその後どうなったのでしょうか。その時は、売却して現金で保有することで安堵感を得たでしょうが、結局は損失を確定しただけで、後で迎えた市場の回復局面に乗り損ねてしまいました。

投資し続けた投資家が報われた

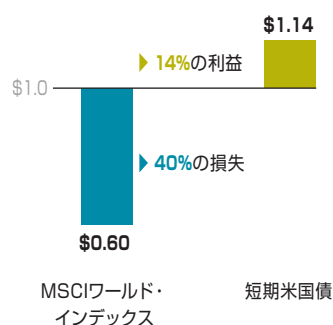
売りたい衝動を抑えて投資を続けた投資家が、長期的に報われました。株式100%で保有を続けた場合、1978年6月までに損失を全額取り戻し、その後2年間で更に33%上昇しました。

株式と債券に分散投資していた投資家は、分散投資が効を奏して被害が軽減され（損失を抑えることができて）、最悪時でも24%の損失にとどまり、株式だけの場合よりもかなり早い1976年3月に損失を取り戻せただけでなく、4年後の1980年までには24%のリターンを上げました。

確かに下落局面でも踏みとどまり投資を続けるのは決して容易なことではありませんが、歴史を見れば継続がいかに最善の長期戦略であるかがわかります。

1973～1974年の下落相場で株式投資家は深刻な損失を被った

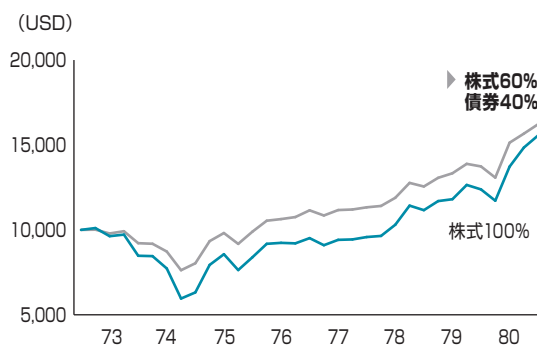
1米ドルを投資した場合のパフォーマンス
1973年1月～1974年9月



過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。投資家はインデックスに直接投資することはできません。出所：Center for Research in Security Prices (CRSP) 及びコンピュスタット

分散投資していた投資家はより良い結果に

10,000米ドルを投資した場合のパフォーマンス
1973年1月～1980年9月



過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。投資家はインデックスに直接投資することはできません。株式はMSCIワールド・インデックス、債券はパークレイズ・キャピタル米国中期国債インデックスのパフォーマンスです。また株式60%／債券40%の構成比は、四半期毎にリバランスするものとしします。出所：コンピュスタット、パークレイズ・キャピタル及びMSCI

時代が変わっても、課題は変わらない

「隣の芝生が青い」とは限りません。寓話の助けを借りて説明しましょう。

昔々、1頭のロバが気難しい主人に仕えていました。とても辛いので暇をもらいたいと懇願し、望みを叶えられました。次に仕えた主人はさらに気難しい男でした。ロバは再び不満を並べたて主人を替えてもらいましたが、最終的には一番気難しい主人に仕える羽目になってしまった、という話です。我慢せずに好条件の境遇を追い求め続けたため、ロバは結局最悪の状況に陥りました。

投資の話に戻ります。最近の例として挙げると、儲かりそうな投資先とされた中国の株式市場に投資家の資金が向かいました。2006年7月から2007年1月にかけて中国株が急上昇していた間は、皆が一斉に大金を注ぎ込みましたが、2008年年初に株価が急落すると、今度は一斉に資金を引揚げました。

中国は将来性の高い活気溢れる市場ですが、中国株投資に限らず、単一の国や単一産業への投資は、あくまでも広く分散した投資の一部とするべきでしょう。

感情をコントロール

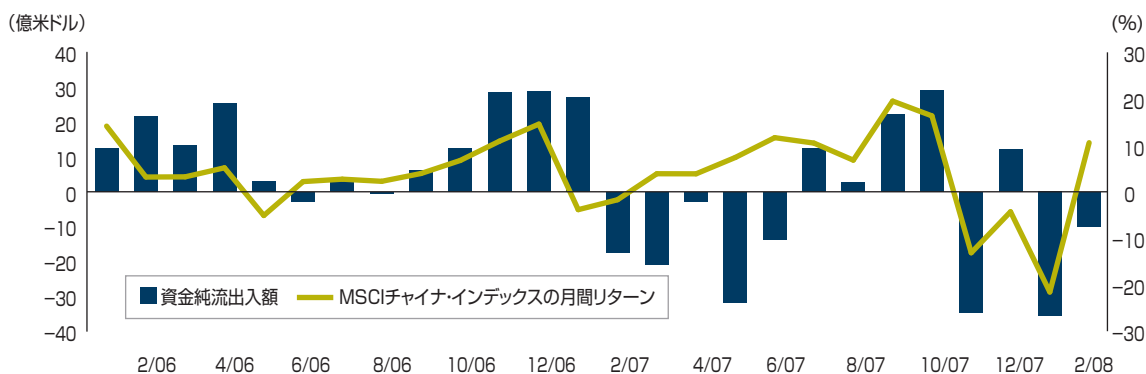
感情がそうさせるのですが、人は誰でもより高いリターンを得ようとして高値をつけている銘柄を、さらに上がるのではないかと後追いついてしまう傾向があります。そしてまた、期待外れで低迷している銘柄はすぐに売却したくなるものです。

しかし残念なことに、こうした自然な感情は「高値で買って安値で売る」を促してしまい、長期的な資産形成の努力を無駄にする恐れがあります。

幸いなことに、感情をコントロールする方法はあります。まずは、感情に惑わされる可能性が常にある、という認識を持つことです。自覚をして十分に注意を払って計画を立てておけば、市場の変動が激しい時でも惑わされずに、自信を持ってより良い投資判断を下すことができます。

他所の芝生はいつも青いか

中国株ファンドへの資金純流出入額と中国の株式市場の月間リターン (MSCIチャイナ・インデックス)



過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。

MSCIチャイナ・インデックスのリターンは、現地通貨建リターンです。投資家はインデックスに直接投資することはできません。

出所：ファクトセット、Feri Fund File、MSCI及びアライアンス・パースタイン

兆しが見えたら良いタイミングで市場に戻ってくる…

発表される経済指標は過去の状況を示すものですが、将来については余り教えてはくれません。そして、誤った推測をしたならば、その代償は高くつきます。

データに固執しても助けにはならない

寄り付きの鐘が鳴り株式の取引が始まると、投資家の元には大量の市場情報が押し寄せてきます。

世の中には株式市場にとどまらず個別銘柄に関する情報も溢れていて、ともすると大局を見失ってしまいます。実は金融の専門家と名乗る人達の予想は当たらないことも多く、傾向や予想というものからは、将来の展開はそれ程わかりません。

具体例を挙げると、リセッション（景気後退）は株式市場にとって厳しい環境である、と一般的に信じられています。しかし、意外なことに1946年から2006年までの間に発生したリセッションを見ると、その後1年以内に米国株は62%の確率で値上がりしていることがわかります。

多すぎる情報

経済指標から株式市場の方向性を知ることができないならば、収集した情報をどうしたらよいのでしょうか。

景気減速を警鐘するコメントを警戒して、保有株式を売却した場合を想像してみましょう。暫くは多額の売却代金をそのままにして次の投資を決めずにいたとしても、いずれ株式市場に戻り投資再開を計画するはずです。資産クラスの中で長期的には資産が成長する可能性が最も高い株式抜きには、将来のための投資はできません。

とはいえ、株式への投資再開はいつ行うべきなのでしょう。売買のタイミングで成功するためには、買い時と売り時の2回、的確にタイミングを捉える必要があります。歴史を振り返れば、そのような「わざ」はほぼ不可能であることがうかがえます。

したがって、難しい売買のタイミングに賭けるのではなく、その代わりタイミングに頼らない普遍的な戦略が賢明と言うことになるでしょう。

今の悪材料が今後の市況悪化を予言するとは限らない

	悪材料が出た後、 株価が上昇 / 下落する確率*	
	株価の上昇	株価の下落
リセッション [†]	確率は62%	確率は38%
金利上昇 [‡]	73	27
10%超の原油価格上昇	76	24

*悪材料出現後12カ月間における確率。1946年から2006年までの間に、26回のリセッション、222回の金利上昇、181回の10%超の原油価格上昇局面について、その後の騰落の確率を測定。

[†]リセッションとは、平均GDP成長率が4四半期連続して低下した場合と定義します。

[‡]10年物米国債の金利。

出所：コンピュスタット、米国商務省、ファクトセット、米国連邦準備制度、シカゴ大学出版局発行 Journal of Business 誌 (1976年1月号)「Stocks, Bonds, Bills, and Inflation: Year-by-Year Historical Returns」ロジャー・G・イボットソン、レックス・A・シンクフィールド共著、アライアンス・バーンスタイン

実は市場の回復の多くはごく短期間に起こっている

願いは簡単に叶わないのが人生です。寓話に出てくるカラスの教えを乞うことにしましょう。

喉が渴いたカラスは水がめを見つけましたが、水がめの口が狭すぎて、底の方にある水に嘴が届きません。水がめを押し倒そうと力の限り押し試みましたが、カラスには重すぎました。カラスは諦めずに小石を一つずつ水がめに落とし、嘴の先がようやく水に触れるところまで水位を上げて望みを叶えることができたのでした。

この話と同じように、株式市場でも忍耐が必要です。過去を振り返ってみると、市場の上昇局面の多くはごく短期間に起こっています。1970年から2008年末までの約40年間（468カ月間）を見ると、実はこの期間の市場のリターンを、パフォーマンスの良い上位48カ月で稼ぎ出しています。

この上位48カ月の平均月間リターンは7.6%であったのに対し、それ以外の期間の平均月間リターンはわずか-0.04%でした。

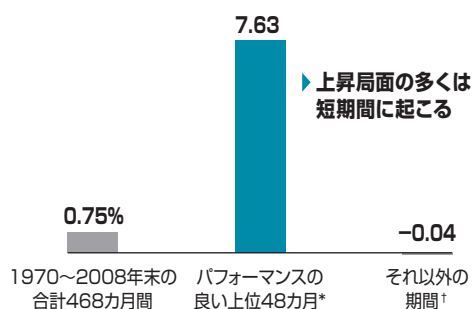
未来を見通せる水晶玉はない

しかしながら、この48カ月のような絶好のタイミングがいつ来るかは誰にも分かりません。市場というものは通常は値動きの方向性を定めて変動しているわけではありません。予想外のタイミングに急騰したら、また法則性のない通常の値動きに戻るものです。

このような短期間に終わる急騰局面を予測して狙い撃ちすることは、カラスが重い水がめを押し倒そうとしていたのと同じように無理なことです。しかし忍耐強く投資を継続していれば、最終的に急騰する局面に居合わせることができます。

株式市場の最大上昇期に乗り損ねた場合の大きな損失

世界の株式市場の平均月間リターン (MSCIワールド・インデックス)
1970~2008年



過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。
2008年12月31日現在
投資家はインデックスに直接投資することはできません。
米ドルベースでのリターン。
*全期間の約10%
†全期間の約90%
出所：MSCI 及びアライアンス・バーンスタイン

株式市場の急騰局面を享受する
最善の戦略とは—投資を継続する
という実に単純明解な戦略

注意すること：分散投資が必要

人生において、確実なことは少ない。一つ確実なのは、市場は変動するということ。

平静な時でさえ、市場の値動きは予測不可能

資本市場には極端な動きをした期間が幾度かありました。1970年代初めの弱気相場や1990年代の狂乱のITバブル期などがそうですが、いずれも予測はできず、多くの投資家が翻弄され苦い過ちを犯しました。

では市場が平静なら、どちらに向かうのかを見抜けるのでしょうか。残念ながら、そうとも言えません。市場が上昇しようとして、下落しようとして、あるいは横ばいであろうと、今後を予測することはできません。

それでも確実に言えることは、常に勝ち、いつも一番であり続ける投資対象はないということです。過去のある1年間、1カ月、または一日でもよいのですが、リターンの順位表を見ると、特定の資産クラスが常に勝ち続けた、もしくは負け続けたことがなかったという事実気づかれるはず。普通は最高位でも最下位でもない、その間のどこかの順位にいます。

今日の勝者も、明日は敗者に

今度は新興国市場を例にとります。2000年から2002年にかけて新興国の株式市場は下落し、深刻な状況にありました。しかしその後の2003年から2007年までは目覚ましい上昇を示し、年率で37%のリターンを記録しました。

このような相場の反転は日常茶飯事であるため、高いリターンを獲得しようと単一の資産クラスへ大きく賭けるような戦略は避けるべきです。ましてや数銘柄の株式だけに頼るなど論外。長期目標を追求するにあたり、極端な結果とならないよう運用を円滑に進めるためには、バランスの取れた分散投資が肝要です。

常に勝ち続ける資産クラスはない

各暦年*リターン(%)、米ドルベース

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011*
高い	現金等 +5.9	現金等 +3.8	世界の債券 +16.5	新興国の株式 +55.8	新興国の株式 +25.6	新興国の株式 +34.0	新興国の株式 +32.2	新興国の株式 +39.4	世界の債券 +4.8	新興国の株式 +78.5	新興国の株式 +18.9	世界の債券 +5.4
	世界の債券 +3.2	世界の債券 +1.6	現金等 +1.6	世界のバリュー株式 +38.1	世界のバリュー株式 +18.5	世界のバリュー株式 +9.6	世界のバリュー株式 +25.1	世界のグロース株式 +14.8	現金等 +1.6	世界のグロース株式 +33.3	世界のグロース株式 +14.5	現金等 +0.0
	世界のバリュー株式 +0.1	新興国の株式 -2.6	新興国の株式 -6.2	世界のグロース株式 +28.1	世界のグロース株式 +10.9	世界のグロース株式 +9.4	世界のグロース株式 +15.1	世界の債券 +9.5	世界のバリュー株式 -40.4	世界のバリュー株式 +26.7	世界のバリュー株式 +9.0	世界のグロース株式 -12.1
	世界のグロース株式 -25.7	世界のバリュー株式 -14.9	世界のグロース株式 -19.9	世界の債券 +12.5	世界の債券 +9.3	現金等 +3.0	世界の債券 +6.6	現金等 +4.7	世界のグロース株式 -41.1	世界の債券 +6.9	世界の債券 +5.5	世界のバリュー株式 -12.3
低い	新興国の株式 -30.8	世界のグロース株式 -19.4	世界のバリュー株式 -19.9	現金等 +1.0	現金等 +1.2	世界の債券 -4.5	現金等 +4.8	世界のバリュー株式 +3.4	新興国の株式 -53.3	現金等 +0.1	現金等 +0.1	新興国の株式 -21.9

過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。

投資家はインデックスに直接投資することはできません。

2011年9月30日現在。*2011年1月-9月の実績値。

次のインデックスのリターンで示しています。世界のバリュー株式：MSCIワールド・バリュー・インデックス、世界のグロース株式：MSCIワールド・グロース・インデックス、新興国の株式：MSCIエマージング・マーケット・インデックス、世界の債券：パークレイズ・キャピタル・グローバル総合債券インデックス、現金等：米国財務省短期証券インデックス

当資料の表紙「当資料のお取り扱いにおけるご注意」をご一読ください。

常に勝ち続ける国はない

資産クラス別と同じように、国別のパフォーマンスでも、最高順位は次々と入れ替わります。1997年はリターンが57%のイタリアがトップでした。最下位は香港で、マイナスのリターンでした。しかし2007年には立場が逆転し、香港が41%の輝かしいリターンで最高を誇り、イタリアは最下位クラスに低迷しました。

国別リターンの最高順位が絶えず入れ替わるのはなぜでしょうか。リターンには過去の平均値に戻ろうとする傾向があるためです。また各国の状況は様々であり、景気の代表的指数である消費者信頼感指数が高水準で景気が明るい見通しの国もあれば、政治に問題があり混迷している国もあるからです。

ある国が直近に他国を上回るリターンを上げたとして、その原因が何にせよ、次に高いリターンを上げる国を事前に予測することは不可能です。ですから、投資先の国についても分散するのが賢明です。

投資スタイルにも流行りがあるが…

グロース株、バリュー株という投資スタイルも同じく入れ替わります。性質が異なるためです。グロース株とは、急速に利益成長を遂げている企業の株式のことであり、一方バリュー株とは、株価が本来の価値を下回って割安に取引されている企業の株式のことを指します。

1993年終盤から2000年初頭までの間、グロース株は急騰し、バリュー株の約2倍のパフォーマンスを上げましたが、2000年から2006年終盤にかけては、バリュー株がグロース株を大きく上回りました。しかしその後投資家心理は再度逆転しています。でも次の展開は誰にも分かりません。

これまでも、グロース株投資とバリュー株投資のスタイルが不意に入れ替わることが多々ありました。ですから最善の方法とは、投資資金をグロース株とバリュー株に均等に分散して、投資スタイルの交替に惑わされることなく資産運用を円滑に進めることです。

常に勝ち続ける国はない、負け続ける国もない

各暦年*リターン (%)、米ドルベース

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011*
高い	英国 -11.7	米国 -12.4	日本 -10.3	ブラジル +115.0	ブラジル +35.5	ブラジル +56.4	中国 +82.9	ブラジル +79.6	日本 -29.2	ブラジル +128.1	日本 +15.4	米国 -9.1
	ブラジル -11.7	英国 -14.0	中国 -14.0	中国 +87.6	英国 +19.6	日本 +25.5	ブラジル +45.3	中国 +66.2	米国 -37.6	中国 +62.3	米国 +14.8	英国 -10.7
	米国 -12.8	ブラジル -17.0	英国 -15.2	ドイツ +63.8	ドイツ +16.2	中国 +19.8	ドイツ +36.0	ドイツ +35.2	ドイツ -45.9	英国 +43.3	英国 +8.8	日本 -10.9
	ドイツ -15.6	ドイツ -22.4	米国 -23.1	日本 +35.9	日本 +15.9	ドイツ +9.9	英国 +30.6	英国 +8.4	英国 -48.3	米国 +26.3	ドイツ +8.4	ドイツ -21.2
	日本 -28.2	中国 -24.7	ブラジル -30.7	英国 +32.1	米国 +10.1	英国 +7.4	米国 +14.7	米国 +5.4	中国 -50.8	ドイツ +25.2	ブラジル +6.5	中国 -24.5
	中国 -30.1	日本 -29.4	ドイツ -33.2	米国 +28.4	中国 +1.9	米国 +5.1	日本 +6.2	日本 -4.2	ブラジル -56.2	日本 +6.3	中国 +4.6	ブラジル -28.2
低い												

過去の実績は将来の結果を保証するものではありません。
 投資家はインデックスに直接投資することはできません。
 2011年9月30日現在。*2011年1月-9月の実績値。
 各国のMSCI・カントリー・インデックスのリターンで示しています。
 出所：ブルームバーグ、MSCI、アライアンス・バーンスタイン

投資は長期的なスタンスで

市場の動きに反応した感情に屈し、売買のタイミングを捉えようとすると、資産を傷つけかねません。長期に亘って資産を形成していく最善の方法とは、分散して投資を継続することです。

より良い対応とは

将来何が起るかは定かではありませんが、過去から学べることは明らかです。株式は非常に厳しい場面を幾つも経ながら、あらゆる投資対象の中で最も高い長期リターンを上げています。

もうひとつの教訓は、市場でタイミングを捉えて売買することが、必ずしも成果を上げるとは限らないこと、ある程度の辛い変動を耐え忍ばずにして市場でリターンを得るのは不可能であることです。

真に優れた投資の考え方とは、その有効性をこれまでに試され、実証済みの考え方です。いつの時代にも通用する「知恵」に支えられたものであり、よくわからない将来の予測に基づくものではありません。「知恵」が教えてくれる投資の考え方とは、様々な国の株式と債券の両方に投資し、しかもグロース株とバリュー株という異なる投資スタイルも組み合わせる世界に分散して投資を継続するべし、ということに尽きます。

資産形成に近道はない

最後にもうひとつ寓話をご紹介します。資産形成には時間を要することを思い起こさせてくれる話です。昔々、年老いた農夫が怠け者の子供達を呼び寄せて「ぶどう畑に宝物を埋めてあるから、見つけた者にそれを与えよう」と言いました。

子供達は必死に休みもせずに宝物を捜し、畑を掘り起こしましたが、見つけることはできませんでした。宝物など元々埋められていなかったのです。けれども子供達が掘り起こしたことにより、隅々まで十分に耕された畑は大豊作になり、結果として子供達の労苦は報われました。

農夫は人間誰しもが抱く一攫千金への野望を承知の上で嘘の話をしたのですが、忍耐力と勤勉こそが本当の富をもたらす真実も承知しており、それを子供達に教えたかったのです。

投資についても、同じことが言えます。一攫で千金を手にする簡単な方法はないのです。資産形成には時間がかかるものであり、周到な計画が必要です。こういった教訓を念頭において実行すれば、私たちも設定した資産目標額に到達できるはずですよ。

過ちから学べば、同じ落とし穴に落ちることはありません。
ファイナンシャル・アドバイザーと相談して長期投資戦略を設計し、
市場に何が起こっても感情に動かされることなく、予め決めた自分の戦略を
堅持することが肝心なのです。

当資料についての重要情報

当資料は、投資判断のご参考となる情報提供を目的としており、勧誘を目的としたものではありません。特定ファンドの取得をご希望の場合には当該ファンドの目論見書をご覧ください。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願いいたします。下記の内容は、ファンドをお申込みされる際に、投資家の皆様にご確認いただきたい事項としてお知らせするものです。

■ファンドのリスクについて

アライアンス・バーンスタイン株式会社の設定・運用するファンドは株式・債券等の値動きのある金融商品等に投資します（外貨建資産には為替変動リスクもあります。）ので、基準価額は変動し、投資元本を割り込むことがあります。したがって、元金が保証されているものではありません。ファンドが投資した資産の価値の減少を含むリスクは、ファンドの受益者に帰属します。リスクの要因については、各ファンドが投資する金融商品等により異なりますので、お申込みにあたっては、各ファンドの目論見書をご覧ください。

■お客様にご負担いただく費用

ファンドのご購入時や運用期間中には以下の費用がかかります

- ・ 申込時に直接ご負担いただく費用：申込み手数料 上限3.15%（税込み）です。
- ・ 換金時に直接ご負担いただく費用：信託財産留保金 上限0.5%です。
- ・ 保有期間に間接的にご負担いただく費用：信託報酬 上限1.974%（税込み）です。

その他費用：上記以外に保有期間に応じてご負担いただく費用があります。目論見書、契約締結前交付書面等でご確認ください。

上記に記載しているリスクや費用項目につきましては、一般的なファンドを想定しています。費用の料率につきましてはアライアンス・バーンスタイン株式会社が運用するすべてのファンドのうち、徴収するそれぞれの費用における最高の料率を記載しております。


ALLIANCEBERNSTEIN

アライアンス・バーンスタイン株式会社

金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第303号

【加入協会】社団法人投資信託協会／社団法人日本証券投資顧問業協会

www.alliancebernstein.co.jp
www.abcafe.jp

当資料の表紙「当資料のお取り扱いにおけるご注意」をご一読ください。